第71回

上高井教育研究集会概要

令和6年度

上　高　井　教　育　会
上高井校長教頭組合
県教職員組合上高井支部

――― 目　　次 ―――

まえがき　……　1

大会スナップ　……　2

７　子どもとスポーツ・遊び（相森中学校）　……　4

８　教育条件の整備（須坂将学校）　……　5

９　情報教育（墨坂中学校）　……　6

10　国際理解・コミュニケーション活動（仁礼小学校）……　7

11　特別支援教育（須坂小学校）　……　8

12　表現力・感性、思考力の育成（相森中学校）　……　9

13　子どもと本（墨坂中学校）……　10

あとがき　……　11

ま　え　が　き

去る９月７日(土)、上高井教育会、上高井校長教頭組合、長野県教職員組合上高井支部の共催のもと、「第 71 回上高井教育研究集会」が盛況のうちに開催されました。須坂小学校、仁礼小学校、相森中学校、墨坂中学校を会場に、会員、保護者、地域の方々など、２５０名に及ぶ参加者が集い、活発な議論を繰り広げられました。

ご多忙の中、ご臨席を賜りました須坂市、小布施町、高山村の教育長様をはじめ、地域の皆様、ＰＴＡの皆様、教育関係者の皆様、そして熱心にご指導いただき助言者の皆様に、心から感謝申し上げます。皆様の温かいご支援のおかげで、充実した研究集会となりました。

近年、少子化、グローバル化、情報化の進展、家族形態の変化や価値観の多様化、子どもの貧困など、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しています。特に地域コミュニティの希薄化、学力問題、ＳＮＳ等を巡るトラブルなど、子どもたちが直面する課題が指摘されています。こうした課題は、上高井の子どもたちにおいても例外ではありません。

こうした社会状況の中で、学校と家庭、地域が一体となり、子どもたちの健やかな学びや成長を支える地域づくりが必要です。また、常に社会全体で互いのウェルビーイングについて考え、そのために何ができるかを問い、共に学び続ける社会の形成がますます重要になっていると感じています。

今回の研究集会では、日々の教育活動の実践を持ち寄り、成果や課題について語り合うことで、子どもたちへの理解を深め、よりよい教育環境を整えるためのヒントを共有することができました。地域や子どもたちの課題に対して、共に学び合い、協働して解決に向かうことが、上高井に生きる私たち全員の幸せにもつながると信じています。

本集会で得られた学びや体験が、明日からの学校教育、家庭教育、地域における協働の場に少しでも活かされることを願っています。上高井に生きる私たち全員で、子どもたちの未来を明るく照らしていきましょう。

最後になりましたが、上高井教育研究集会の開催にあたりご尽力いただきました中村新治教研推進委員長をはじめ推進委員の皆様、各校の代表者の皆様、分科会を運営していただいた分科会長、司会者、記録者の皆様、貴重なレポートをご準備いただいた皆様、会場を提供し準備していただいた各会場校の校長先生をはじめ各校の先生方に深く感謝申し上げます。皆様の熱意とご協力のおかげで、実りある教育研究集会となりました。誠にありがとうございました。

上高井教育研究集会委員長　　梅本　裕之

令和６年度　教研集会スナップ

今年度は３校７会場に分散して教研集会が開催されました。

会場校の先生方には会場準備等さまざまな面でご協力いただきました。感謝申し上げます。

各分科会で、助言者の先生方には丁寧でわかりやすいご指導をいただきました。ワークショップや体験の講師としてご活躍していただいた方もおられます。本当にありがとうございました。

また、分科会長、司会者の皆様には分科会が滞りなく運営できるよう、ご尽力いただきました。

分科会にご自身の実践等を発表したいただいた皆様、お忙しい中準備をしてくださりありがとうございました。

本年度も、教職員、PTA、地域の皆様をはじめ、大勢の方々にご参加いただき、ともに学び会う機会となりました。参加していただいた皆様、ありがとうございました。

最後に、教研集会開催にかかわり、協力してくださった方々に心より御礼申し上げます。

ありがとうございました。

第７分科会　子どもとスポーツ

一　研究テーマ　子どもの運動習慣の形成に向けた取り組みについて

二　研究の成果

関先生のご講義より

「運動とスポーツ」　キーワード：フィジカルリテラシー･･･日本では未定義でこれから重要に

・フィジカルリテラシー＝認知・心理・身体・社会性の４つが重要な要件

アタマ・ココロ・カラダ・カカワリ

・「運動」「スポーツ」「体育」の言葉の違い（定義）

運動：体力維持増進のために計画的・定期的に実施されるもの（厚労省）
スポーツ：一定のルールに則って競う活動
体育：身体に関する教育

言葉を理解して教育をしたい

・PHV 年齢（最大発育速度）を考えたスポーツ指導の重要性

種目に応じた「始める」年齢は違う･･･スポーツ障害につながる可能性を少なくする
あまりにも小さなうちから「同じスポーツ」ばかりをやらせない
柔軟性の低下＝成長している証拠　日常的なトレーニングの重要性

・体力　2002 年～2021 年　子ども UP　高齢者 UP　成年 DOWN　なぜか？

身体活動量により、病気の発症率に関係している　働き盛りの健康に関心
将来的に、成年が高齢者になったときにどうなるのか　⇒　国の施策

・長野県体力テスト　　R2～R4 低下　コロナの影響　　R5 上昇傾向に転じる
中学女子＝歯止めがかからない現状

・「体力向上」という言葉を極力使わないようにしたい

→多忙な学校の中で、体力向上の取り組み・施策を考えることは難しい
→子どもたちの誰もが目指すかと考えると難しい

・「体づくり」という言葉に変化させたい

→健康づくりの意識を持たせたい

・運動　食事　睡眠時間（7 時間が適切・多くても少なくてもよくないという説）

→日常生活の中に取り入れていく　心拍数を少しあげる運動を日常生活に
→将来、そんなことが当たり前にできる子どもたちにしたい

運動実践

・姿勢づくり　→　前から見たとき（左右の肩の高さ）＝左右の筋肉の固さの違い
子どもで左右差があるとき･･･側湾症の疑い
横から見たとき（耳の位置が肩の上か）＝猫背

・背筋の伸びがパフォーマンスに影響･･･姿勢づくりが必要

体幹の力　トレーニングの必要性

三　残された課題

・子どもが自分で「運動を継続したい」と思える指導の在り方

第８分科会　教育条件の整備

一　研究テーマ

児童生徒が安心して学校生活を送るための教育条件整備はどうあったらよいか。

二　研究成果

１　講演

「学校に足が向かない児童生徒に対し、行政として学校として保護者として、できること」

講師　　須坂市教育委員会主任指導主事　　後藤　昭彦先生

須坂市における不登校児童生徒の現状や対応について、国の動向や須坂市のデータ等を基に講義していただいた。市としても多種多様な児童生徒に対応すべく、様々な段階での“居場所”や人的配置などを用意していること、また、児童生徒個々に目標を設定し、学校に通うことだけを最終目標とせずに社会との繋がりを目指していくべきで、そのためにも家庭と学校、関係機関の連携を密にしていくことが重要であり、子どもや保護者が学校の先生たちに相談できる環境、あるいは学校の対応に疑問を感じたら校長先生や市教委に相談できる環境、そして家庭は子どもが安らげる、くつろげる環境づくりを心がけるようにしてほしいとのお話しでした。

２　レポート発表の概要

（1）「クラスでの環境整備と支援の手立て」　　森上小学校　　山本　能彦先生

“特別な配慮を要する子どもを学級経営の柱にすえる”という考え方に基づき、教室の学習環境の整備や支援の先生の支援を中心にした学びの実践を行ったところ、子どもたちが集中して授業に取り組む姿が出てきた。

子どもたちに指導したこととして「良い姿勢で取り組む」「靴を揃える」「机上、ロッカー、筆箱の整理」を、教室環境として「机の位置の徹底」「学級物品の置き場所の徹底」「黒板周りの掲示物の撤去」「朝の会での一日の流れの確認」などの実践をした。また授業では、途中から入室しても授業の経過がつかめるような板書や、短く端的な声がけを心がけた。

（2）「学校集金アンケート」　　相森中学校　　小澤　佑介先生

上高井の小中学校にアンケートを取り、学校集金の現状をまとめた。

学年費については物価高騰の影響で前年度比で上がっている学校が見受けられた。修学旅行費についても、バス料金の高騰に伴い、全体的に値上がりの状況だった。学校としても保護者負担軽減のために各種用紙やフラットファイルなどを公費で支出しているが、集金の減額には至っていない。

負担軽減はもちろん大事だが、学年費で言えば学力向上との兼ね合いも重要という視点もある。また、集金回数を見直したいので研究中という学校もあった。

３　助言者の指導　　長野市立東部中学校　教頭マネジメント支援員　　竹内　光弘先生

義務教育とは子どもにとっての義務ではないということを押さえておきたい。大人が子どもに教育を保障する義務、そのための教育条件整備である。それには人・物・金が必要であり、市町村の予算だけでは賄えない実状があり、保護者にも負担していただいている現状。限られた予算を有効活用するためにも校内職員間のコミュニケーションが大事である。また、修学旅行にもっと保護者の意見を反映させてはどうか。物価高騰の中で修学旅行のあり方を見直す時期かもしれない。

近年、給食費を無償にする自治体が増えている。エアコンやプロジェクター、35 人学級など昔では考えられなかったことが当たり前になってきている。教育条件整備はこれからも発展していく。

第９分科会　情報教育

１．研究テーマ　「個別最適な学びと協働的な学びの一体化～ICT を活用して～」

２，研究成果

(1) レポート発表

①「夢ランド～バーチャル×リアル～」　小山小学校　清水　貴雄　先生　島田　　圭　先生

Makers フェロープログラムをきっかけに、2 年生と 5 年生が合同で「夢ランド」というプログラミングプロジェクトを実施。スクラッチと工作を組み合わせて、バーチャルとリアルな世界をつなぐユニークな試み。児童たちはゼロからスタートし協力して作品を作り上げ、プログラミングの楽しさや論理的思考力を身につけた。教師は児童の自主性を尊重し、成長を促すことで大きな成果を上げた。

②「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」　東中学校　田中　英春先生

R5 年度から文科省の事業で、全教科で単元内自由進度学習における ICT 活用を進める学校。生徒は学習に主体性を持つようになり、教員は ICT 活用の研修や授業研究を進めている。しかし、単元の選定や個々の生徒への対応など課題も。今後は、ICT を効果的に活用し、生徒一人ひとりの個性に合わせた学習を実現するために、教員の ICT スキル向上などが求められる。

(2) 学んだこと

児童の主体性と意欲: 児童が自らテーマを設定し、プログラミングに取り組む姿に大きな可能性を感じた。異学年交流を通して、互いに学び合い、高め合う姿が印象的。

プログラミングの楽しさ: ゲーム感覚でプログラミングに取り組むことができ、児童の創造性を育むことにつながると感じた。

ICT 活用の有効性: ICT を効果的に活用することで、学習の幅が広がり、より深い学びにつながることが分かった。

教師の役割の変化: 教師が一方的に教えるのではなく、児童の学びをサポートするファシリテーターとしての役割が重要であることを認識した。

準備の負担: 自由進度学習の実施には、教員の負担が増えることが懸念される。

ICT 環境の整備: すべての学校で ICT 環境が整っているとは限らないため、環境整備が課題。

評価方法: 自由進度学習における評価方法の確立が求められる。

自由進度学習のさらなる研究: 自由進度学習の効果的な実践方法について、より多くの研究が必要。

ICT 環境の整備: すべての学校で ICT 環境が整備されるよう、国や地方自治体の支援の必要性。

教員の研修の充実: 教員の ICT スキル向上や、自由進度学習に関する研修の充実が不可欠。

今回の参観を通して、プログラミング教育と自由進度学習が、児童の成長に大きな可能性をもたらすことが分かりました。しかし、これらの取り組みを成功させるためには、教職員の意識改革や、学校全体の体制づくりが重要です。今後も、様々な関係者が協力し、より良い教育の実現を目指していく必要があります。

(3) 助言者のご指導

教育は一方通行ではない: 教師が一方的に教えるのではなく、子どもたちと一緒に学び、成長していくことが重要である。

子どもたちの可能性を信じる: 子どもたちには無限の可能性があり、彼らが自ら学び、成長していくことを信じることが大切である。

社会とのつながりを意識した教育: 学校で学んだことが、社会に出てからも活かせるような学びを提供することが重要である。

ICT を効果的に活用する: ICT を教育の場に積極的に取り入れることで、より効果的な学習が可能になる。

第１０分科会　国際理解教育・コミュニケーション活動

一　研究テーマ

国際理解教育とコミュニケーション活動のあり方

二　研究成果

１　レポート発表の概要

本分科会では、レポート発表ではなく、参加者全員が個々の実践を簡略化したレポートとして持ち寄り、小グループで討議を行った。内容は、それぞれが自身で取り組んだり、学校として取り組んだりしてきた「国際理解教育」についてや、授業の中で行っている「コミュニケーション活動」の紹介であった。それぞれの発表を受けて、４～５名の小グループで、意見交換を行った。

２　学んだこと

（1）参加者の実践から

・外国語に限らず、コミュニケーションを行う際には、相手の状況や考えを推し量りながら話したり、文化の違いを意識したりするなど、様々な思考が働くことが、各実践発表を通して感じられた。

・コミュニケーション活動には、「必要感」をもって行われるということが大切である。日頃私たちが行っている活動には、果たして子どもの「知りたい」という気持ちが大切にされているだろうかと、振り返ってみることが必要ではないかと感じた。

３　助言者の指導

〇助言者の先生が長年携わられた「雑誌信濃教育」の編集後記を資料として提示していただいた。

・英語は、それ自体が学ぶ対象ではなく、本来はコミュニケーションの際の道具として活用していきたい。

・英語を学ぶことのモチベーションとして、コミュニケーションが成立することの喜び、英語が話せることでこんなことが可能になる、というプラスのモチベーションをもたせたい。

・今の学習指導要領でも重要視されている「目的・場面・状況」をより意識したい。それらがあることで、多くのコミュニケーションの成立は容易になる。そのような中で互いにわかり合えることが、英語のモチベーションにもつながる。

・遊びの中で英語を使う経験を軸に、いろいろな工夫ができる。How many～？で自分の地域にあるものを数えるなど、みんなで楽しみながら行う活動を、地域学習等につなげることができると、コミュニケーションを図ることの価値がさらに実感できる。

・ICT 機器の活用や、自由進度学習など、様々な取組により広がる英語教育の中には、課題ももちろんある。人が使う ICT、生身の人同士のコミュニケーションが大切にされた自由進度学習など、コミュニケーションのよさを活かす学習を大切にしたい。

三　残された課題

・ICT は便利だが、「人が機械に使われない」よう、上手な使い方を考えていきたい。

・自由進度学習では、子どもとテキストの対話のみにならないよう、コミュニケーションのあり方について、さらに実践を積み、研究を深めていきたい。

第１１分科会　特別支援教育

一　研究テーマ　　「子どものニーズに応じた支援について考える」

二　研究成果

１　レポート発表

（１）「子どもたちが安心して学ぶことができる学級づくり・授業づくりを目指して

須坂市立仁礼小学校　保谷　和弘先生

通常学級の子どもたちが多様化している中で、教室環境のUD化、人的環境のUD化、授業のUD化の実践を通して、すべての子どもたちにとって分かりやすい環境づくり、授業づくりについて、発表していただいた。

（２）「校内支援体制について」　須坂市立仁礼小学校　宮﨑　文野先生

支援を必要としている児童は多いが、職員が限られている中で、子どもたちをいかに支援していくか、困っている子どもたちを何とか助けるためには、どうすればよいかという課題に対して、特別支援教育コーディネーターが悩みながら取り組んでいる取り組みを主に２つ紹介していただいた。１つ目は、時間割を全体で共有することであり、共有することで各担任が支援員に来てほしい時間を伝えられることが挙げられる。２つ目は、児童理解と支援のためのシートを担任やコーディネーターが連携しながら作成することで、実態把握や支援の手立てや目標の共有化に役立っている。

（３）「農作業・飼育・販売活動における自立活動の指導について」

須坂市立小山小学校　林　久寿先生

小山小学校の自閉症・情緒障害児学級では、自立活動として、農作業やうずらの飼育、製品の販売活動を行っている。これらの活動を通して、人間関係の形成やコミュニケーション、自己肯定感が高まることを目標に取り組みが行われている。子どもたちは、活動に目的をもって主体的に取り組む姿につながっている。

２　学んだこと

・「子どもたちが多様化する中で、ＵＤが大切」と言われるが、実際の通常学級では、どのような工夫がされているかがよく理解できた。

・時間割を全校で共有することで、支援員のサポートが必要な時間に的確に配置している。

・子供たちが興味を示す農作業やうずらの飼育を通して、自立活動のねらいを達成することを目指した実践例を学ぶことができた。

３　助言者の指導

・レポート発表者の先生方の取り組みは、素晴らしい。継続してもらいたい。

・全国的な傾向として、通常学級の子どもも特別支援学級に在籍する子どもも多様化している。環境のＵＤ、授業のＵＤ、人的なＵＤに加えて、行事のＵＤも進めてほしい。行事のＵＤとは、例えば運動会であれば、聴覚過敏の子に配慮して大きな音を出さないようにする、子どもに出たい競技を選んでもらう、など通常の行事のあり方を疑い、常に子どもに寄り添った行事にしていく必要がある。

三　残された課題

・特になし

第１２分科会　表現力・感性，思考力の育成

一　研究テーマ

子どもたちの豊かな表現力や感性を育てるための指導・支援のあり方

二　研究成果

１　各校の作品，実践や取り組みの発表

・児童生徒の作品の紹介

絵画作品，造形あそびの活動，家庭科作品など。

・国語や家庭科，音楽，理科の学習での実践紹介

２　学んだこと

（1）やってみたいと思う題材や活動

児童生徒は，無限の想像力を持っている。その想像する力を表現できる場や時間を設定し，表現の良さを称賛していくことで，表現力を豊かにすることができる。わくわくし，やってみたいと思える題材との出会いや活動が表現力や感性を育成していく大事なものだと学んだ。

（2）体験が表現につながる

国語の「くじらぐも」の学習では，同じ場面での活動（４時間目の体育の時間）で，感性をはたらかせ空の雲の形で遊ぶことができ，お話に出てくる場面を自分たちで考え表現することができる。児童にとって，実体験が伴ったものを表現することを大事にしていきたい。

３　助言者の指導

佐藤いずみさんによる『新聞紙アート』をワークショップという形でおこなった。

①表現の自由　　②褒める，認める　の２点をお話と活動の中で教わった。

新聞紙で「きのこ」を作成する活動で，大きさや形にこだわらず，思い思いの「きのこ」を作ることを大事にしてくださり，「いいですね」「おもしろいですね」と楽しめるように声がけをしてくださいました。

三　残された課題

・短時間での発表の工夫

レポート発表なしで，作品や実践の発表をお願いした。各校の児童生徒の作品の紹介と授業実践の発表に十分な時間を確保することができなかった。発表の仕方を工夫し，短時間でもわかりやすいものにしていきたい。

第１３分科会　子どもと本

一　研究テーマ

子どもが読書に親しみながら、心豊かな生活を送れるようになるための、学校・家庭・地域の支援のあり方

二　研究成果

1 レポート発表…今年度はレポートは扱わなかった。

２　学んだこと…「ビブリオトーク」の実践を通じて学んだことは以下の通り。

・須坂市子ども読書活動支援研究会による「ビブリオトーク」のデモンストレーションを見て、実践方法を学んだ。
・実際に「ビブリオトーク」を行うことで、自分の面白いと思った本を１冊選んで紹介する方法を学んだ。
・各グループから１冊のチャンプ本を決め、その中から本日のチャンプ本を選ぶ過程を経験した。
・最後に、紹介された本をグループの机の上に並べ、会場の皆で見てまわる時間を持ち、共有した。
・「仕掛学」のような実用書から絵本、児童書、エッセイ、図鑑など、様々なジャンルから選書が可能である。
・普段何気なく見たり読んだりしている本も、「面白さ」に特化して「どのように面白さを語るか」や「どこに注目して語れば読んでみたいと思ってもらえるか」を考えることで、本の内面に近づくことができ、自分自身の内面にも気づくことができた。これにより、わくわく感を感じることができた。
・自分が選んだ１冊や会場全体の本を通じて、この「ビブリオトーク」の実践が本を知ること、すなわち自分を見つめ直すきっかけになり、学校や家庭での実践を考えるようになった。
・坪井巧子先生からは、１０月１２日開催の長野県図書館大会での実践事例発表の紹介があり参加してみたいと思った。

（ビブリオトークメモ）　各グループのチャンプ本は以下の通り。　☆は本日のチャンプ本

１班	梅本　京子（常盤中）	『美しき愚かものたちのタブロー』	原田マハ	（文芸春秋）
２班	藤岳　香里（須坂支援）	『ねこはるすばん』	町田尚子	（ほるぷ出版）
３班	増村　智子（墨坂中Ｐ）	『さくらえび』	さくらももこ	（新潮文庫）
４班	井上　亜里（須坂小）	『ハンバーグつくろうよ』	角野栄子	（ポプラ社）
５班	小林志津代（須坂小）	『家族だから愛したんじゃなくて愛したのが家族だった』	岸田奈美	（小学館）
６班	宮入　勝彦（常盤中）	『ひび割れつぼと少年』	松本純	（株式会社アートデイズ）
☆７班	中村　早海（須坂支援）	『仕掛学　人を動かすアイデアの作り方』	松村真宏	（東洋経済新報社）
８班	藤澤　隆之（豊丘小）	『食堂のおばちゃん』	山口恵以子	（角川春樹事務所）

３　助言者の指導

・本を知ることは自分を見つめ直すことになり、新たな自分を知るきっかけになる。「ビブリオトーク」では、自分が面白いと思った本への愛情を存分に語ってほしい。
・中学校では図書館を利用する生徒としない生徒の二極化が見られるが、「ビブリオトーク」を実施することで図書館に足を運ぶ生徒が増えたという実例もある。教室の雰囲気づくりにも役立ててほしい。
・「ビブリオバトル（公式）」ルールでは、本の紹介は５分だが、紹介時間を３分または２分に短縮する等、柔軟に設定して工夫してほしい。
・須坂子ども読書研究会の方によるデモンストレーションを行うことが可能。希望があれば、須坂市役所文化スポーツ課に連絡を。
・発表者でない人は、質疑応答での参加もどんどんしてほしい。
・１０月１２日（土）にメセナホールで開催される長野県図書館大会（須高大会）は、３６年ぶりの須坂市開催となり、『魔女の宅急便』の原作者・角野栄子さんの講演がある。貴重な講演なので、ぜひ参加してお話を聞いてほしい。

三　残された課題

・自分の面白いと思う本を１冊選ぶことは、その日の気分によって変わることがあり、迷ってしまうこともある。（これを「今回はこれ！」といった自己決定力につなげられればと思う。）
・学校現場で「ビブリオトーク」を実践する際には、人間関係が円滑でないと難しいかもしれない。本を選ぶのではなく人を選んでしまったり、紹介がうまくいかないことが懸念される。（あくまでゲームであるという視点を持ち、本が選ばれなかったからといって自分が選ばれなかったのではないと理解することが重要。）
・原稿を読まない、パワーポイント等を使わない発表が「ビブリオトーク」の魅力だと思う。聞き手の反応をみながらトークを進められるのも協調性を養うことにつながるのではないかと考える。（他者意識が培われる。）

あとがき

昨年度、コロナ禍を経て、久しぶりに参集対面方式で開催した第７０回の節目となる上高井教育研究集会に引き続いて、コロナ禍前に開催していた１３分科会のうち、昨年度実施した６分科会以外の７分科会で参集による開催が実現できましたこと、誠に感謝でございます。

この伝統ある本集会の基本方針は、「上高井教育の充実を図るために、教育会・長頭組・県教組が一体となって、現場における教育実践を持ちより、研究協議を通して、その意義を確かめ合い、研究の深化発展を図り、教育推進への自覚を深める。更に、保護者・地域住民の協力参加を得て、地域教育の振興を図る」ことにあります。

当日は、教職員・ＰＴＡ等総勢約２５０名の方々にご参加いただき、今日的教育課題について討議を深めることができました。各分科会場では、日頃の教育実践や問題提起をレポート発表やグループ形式での対話、講習会などを通して、様々な角度から研究が深められました。ここに学校・家庭・地域が一体となって教育問題に取り組んでいこうという強い願いや思いを感じました。多くの方から「参加してよかった」という声を聴くたびに、関係者の一人としてとてもありがたく思います。

当日、実践報告をしていただいたレポート作成者はじめ、多くの皆様に心より御礼申し上げます。

また、助言者の皆様方からは、明日、すぐにでも実践できるようなご助言を丁寧にご指導いただきましたこと、改めて御礼を申し上げます。

このように成果のある教育研究集会になりましたのも、助言者との打ち合わせから分科会の運営にあたるまで綿密な計画を立てていただいた分科会長の皆さんをはじめ、当日の司会者の皆さん、レポートの回収並びに配布、参加者のとりまとめをしていただいた学校代表者の皆さん、そして会場を提供くださいました須坂小学校、仁礼小学校、相森中学校、墨坂中学校の校長先生はじめ先生方、児童生徒のみなさんのおかげであると心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

最後に、本教育研究集会のこれまでの推進状況と今後の推進日程を記し、次年度へ繋げます。

４月１５日	第１回三団体代表者会	・基本方針の確認、推進方法の確認等
	第１回推進委員会	・係分担・推進日程の確認、分科会希望調査の検討等
４月２２日	第２回推進委員会	・分科会設定に関する検討、提出レポート調査検討、他団体要請等
４月２６日	第１回学校代表者会	・基本方針・推進日程の確認、提出レポート等調査依頼等
５月２０日	第３回推進委員会	・参加者確認、分科会長選定・依頼、分科会助言者の選定等
６月　７日	第４回推進委員会	・分科会長会・中間連絡会の持ち方、レポート形式、他団体・来賓参加依頼等
６月１４日	分科会長・司会者打合会	・日程確認、討議題確認、研究計画の立案、分科会運営計画作成等
７月　２日	中間連絡会	・分科会討議計画・記録について、分科会要望書作成等
	第５回推進委員会	・参加者名簿の作成集計、要項作成、当日日程の検討等
７月１２日	第６回推進委員会	・集会要項校正、会場確認、係分担、
８月１９日	第２回学校代表者会	・レポート概要など集約、集会要項配布
	第７回推進委員会	・今後の日程の打ち合わせ　使用物品・人数確認
９月　６日	分科会長会	・前日準備、反省まとめの依頼、当日の動きの確認
	第８回推進委員会	・前日準備、最終確認
９月　７日	教研集会当日	
１０月　１日	第９回推進委員会	・概要の編集、反省の集約、代表者会について
１１月１１日	第２回三団体代表者会	・三団体への答申、会計中間報告、反省総括等
１月２７日	第１０回推進委員会	・会計監査、反省

令和６年９月吉日

第７１回上高井教育研究集会推進委員長　中村 新治